

スクリャービンの「白ミサ」と「黒ミサ」
——後期ピアノソナタにおける思想の表出をめぐる考察——
野原 泰子

アレクサンドル・スクリャービンの後期のピアノソナタ（第6番から第10番）を対象に、その音楽語法と作曲者の思想との連関を検討する。レオニード・サバネーエフは『スクリャービン回想録』で作曲者の楽曲解説を紹介し、後期に言わば対照的な性格（神聖／悪魔的）のソナタが書かれたことを伝える。こうした資料や、作曲者が傾倒した神智学の教理を踏まえ、《プロメテウス》や他のソナタとの比較検討を加えながら、各曲を多角的に分析した。その結果、3つのソナタ（第7、8、10番）と2つのソナタ（第6、9番）が、それぞれ相通ずる性格や思想的内容をもつ作品群として浮かび上がった。本論では第7番「白ミサ」と第9番「黒ミサ」の分析を取り上げながら、5曲のソナタをめぐる独自の解釈を提示する。

第7番を始めとする3曲では、《プロメテウス》にも通ずる共通の手法が随所に見られ、後者と同様、「万物は一者から生じ、やがてそこへ回帰する」という作曲者の神智学的な宇宙観の表現が読み取られる。主題や動機、和声に象徴的な意味が付与され、それらの巧みな操作により、神智学的な見地での宇宙の進化（物質化と霊化）がソナタ形式の枠組みに沿った形で描かれる。その一方で第6番と第9番は、第7番や第8番とは対照的な和声の流れをもち、それが先の3曲とは異なる内容を反映する。特に第9番では、終盤へと漸次的に高揚してゆく構図のなかで、「聖物」（第2主題）が「邪悪な魔力」（第1主題）に毒されてゆく聖物冒瀆的な内容が読み取られる。

これらの創作と並行し、作曲者は《ミステリア》（未完）の構想を温めた。彼の義弟ボリス・シリョーツェルの著述から明らかなのは、そこでも作曲者の宇宙観が主題として思い描かれたことである。3つのソナタには《ミステリア》に通ずる内容、残りの2曲には、その一場面（物質界）に通ずる内容が認められ、それらの《ミステリア》の準備としての側面にも光が当てられる。